

<レポート>

影も溜らずー淡座リサイタルシリーズVol.1 桑原ゆう個展 プレイベントー自作語りとミニライブ

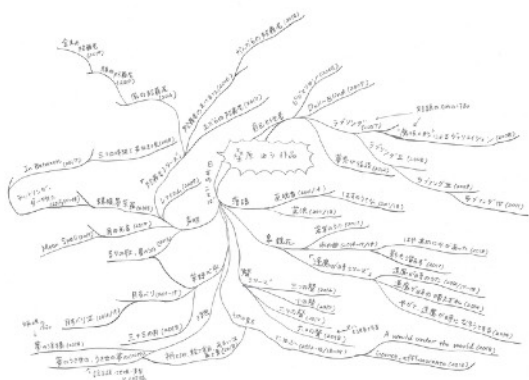


桑原ゆう初の個展は「人となりの見える公演」を目指しました。桑原ゆうがどんな人間で、どんなことを考えて作曲しているかを伝えられるよう、選曲、曲順、プログラム冊子の内容、プレイベントの内容など、全ての要素を構成した、これまでの創作活動ポートフォリオとでもいうべき二日間でした。

プレイベントー自作語りとミニライブ

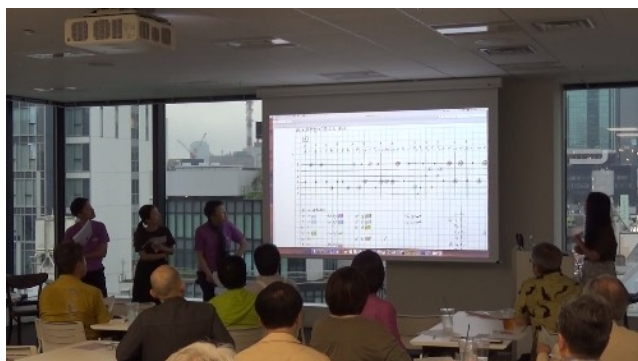
個展のプログラムは、これまでの創作人生において重要な契機となった作品から、作風や編成に偏りがなく、全曲飽きずにお楽しみいただけることを考慮し、慎重に選定しました。プレイベントでのトークは、それらの作品が書かれた経緯、背景、アイデア、作曲の過程をお話するとともに、周辺に位置する作品について言及することにも重きを置きました。作品というのは、その一曲だけで成立していることはなく、ほとんどの場合、複数の作品が相互に関連し合っています。星と星をつなげて星座にするように、作品間の関連性を見ていくことによって、創作活動全体を俯瞰的に捉えてもらうことを意識しました。

一部作品の関連づけ (1993年〜2019年)



一部の作品を関連づけた図

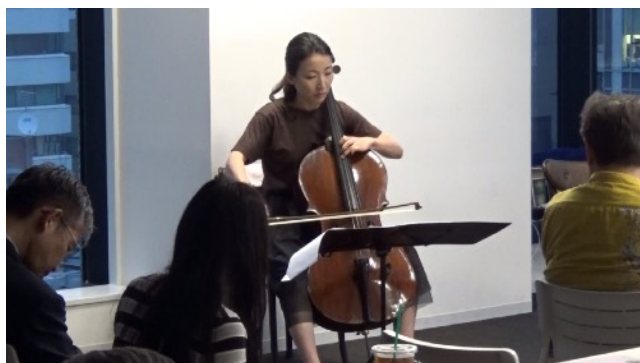
マインドマップ風に記した、一部の作品を関連づけた図をベースに、個展当日のプログラムに沿ってトークを進め、作品の譜面や画像、映像資料などもふんだんに紹介しました。また、頭のなかの音を如何に譜面に落とし込むか、苦心してつくった譜面がどのように現実の音となるかを、淡座メンバーによる実演をはさむことによって、体験していただきました。



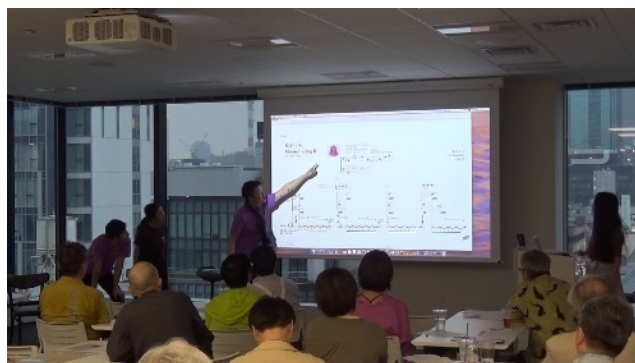
《だんだらの陀羅尼》や《糸の陀羅尼》などの「陀羅尼シリーズ」に用いている、妙法蓮華經陀羅尼品第二十六の呪文の言葉を、どのように分析し、音に結びつけているかを解説。



泉鏡花「海の使者」の擬音語を、どのようにヴァイオリンの音に翻訳しているか、演奏を交えながら解説。



チェロ独奏のための《逢魔が時の歌》



各作品の楽譜をお見せし、各楽器で用いられている特殊な奏法や仕掛けについて解説。淡座の演奏メンバーも、その都度気づいたことについて発言や質問。



最後にトリオで、端唄「年中行事」を演奏。



トークイベント終了後、簡単な懇親会を行いました。

演奏曲／全曲、桑原ゆう作曲作品

- ・絃の陀羅尼（2017）ヴァイオリンと三味線のための
→《だんだらの陀羅尼》との関連（「陀羅尼シリーズ」）
- ・影も溜らず（2017）ヴァイオリン独奏と8人の奏者のための より、部分的に演奏
→泉鏡花「海の使者」の擬音が、どのようにヴァイオリンの音に翻訳されているか
- ・逢魔が時のうた（2014/17-18）チェロ独奏のための
→《影も溜らず》との関連
- ・柄と地、絵と余白、あるいは表と裏（2018）三味線独奏と7人の奏者のための より、部分的に演奏
→三味線独奏とアンサンブルの関係性
- ・端唄「年中行事」（2019）三味線弾き唄い、ヴァイオリン、チェロのための

<イベント概要>

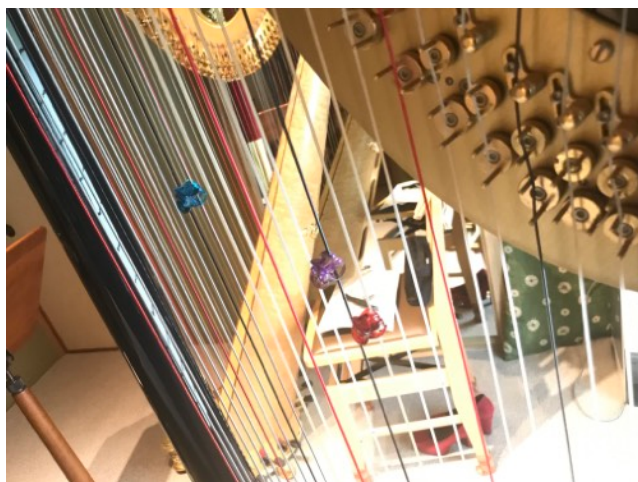
日時／2019年7月13日（土）18:00開演（17:30開場）

会場／JBSトレーニングセンター（東京都港区西新橋2-3-1マークライト虎ノ門9F）

出演／桑原ゆう（トーク）、三瀬俊吾（ヴァイオリン）、竹本聖子（チェロ）、本條秀慈郎（三味線）

リハーサル

アンサンブル作品については、東高円寺のプロフェッショナルパーカッションにて、三日間夜遅くまでのリハーサルが行われました。独奏作品については、それぞれにリハーサルが行われました。



クリップを用いたハープのプリベアド（月すべりII）



影も溜らず ― 淡座リサイタルシリーズVol.1 桑原ゆう個展

個展は曲間のトークや解説は無しでの完全な演奏会形式で行いました。それぞれの作品についての解説、演奏者のプロフィールなどについては、プログラム冊子をご覧ください。プログラム冊子は、随筆二篇と寄稿二篇、付録に作品リストをつけた、手の込んだものをご用意しました。

ゲネプロの様子

→ 付録／ゲネプロでの桑原ゆうの目線👁️映像 (youtubeの限定リンク <https://youtu.be/cIRs022aRX8>)



プログラム／全曲、桑原ゆう作曲作品

- ・ピグマリオン（2003）木管五重奏のための
- ・だんだらの陀羅尼（2018）6人の奏者（fl/picc, cl/bcl, 三味線, vc, perc, pf）のための【日本初演】
- ・ラットリング・ダークネス（2015/17-18）トロンボーン独奏のための【改訂日本初演】
- ・月すべりⅡ（2014/19）ハープ独奏のための【改訂世界初演】
- ・影も溜らず（2017）ヴァイオリン独奏と8人の奏者（fl, cl/bcl, tb, perc, vn, va, vc, cb）のための【日本初演】
- ・柄と地、絵と余白、あるいは表と裏（2018）三味線独奏と7人の奏者（fl/afl, cl/bcl, perc, pf, vn, va, vc）のための【日本初演】
- ・にほふ（2012-13/18-19）16人の奏者（1.1.1.1-1.1.1.0-1perc-1pf-1hp-1acc-2.1.1.1）のための【世界初演】
- ・アンコール：端唄「年中行事」（2019）三味線弾き唄い、ヴァイオリン、チェロのための



1. ピグマリオン



2. だんだらの陀羅尼



3. ラットリング・ダークネス



4. 月すべりⅡ



5. 影も溜らず



6. 柄と地、絵と余白、あるいは表と裏



7. にほふ



最終曲《にほふ》の演奏後、桑原がステージに上がってご挨拶し、アンコールとして、端唄「年中行事」を淡座メンバーが演奏しました。



端唄「年中行事」（アンコール）



ロビーでは、演奏作品のスコアを展示し、開演前や休憩時間に自由にご覧いただきました。



<公演概要>

日時／2019年7月19日（金）19:00開演（18:30開場）

会場／東京オペラシティ リサイタルホール（東京都新宿区西新宿3-20-2 東京オペラシティタワーB1F）

作曲・構成／桑原ゆう

演奏／水戸博之（指揮）、梶川真歩（フルート）、本多啓佑（オーボエ）、西村薫（クラリネット）、中田小弥香（ファゴット）、嵯峨郁恵（ホルン）、籠谷春香（トランペット）、村田厚生（トロンボーン）、大田智美（アコーディオン）、鈴木真希子（ハープ）、大須賀かおり（ピアノ）、中山航介（打楽器）、三瀬俊吾（ヴァイオリン/淡座メンバー）、松岡麻衣子（ヴァイオリン）、笠川恵（ヴィオラ）、竹本聖子（チェロ/淡座メンバー）、佐藤洋嗣（コントラバス）、本條秀慈郎（三味線/淡座メンバー）

主催・企画／一般社団法人淡座

宣伝美術／川村祐介

協賛／株式会社エボラブルアジア、日本ビジネスシステムズ株式会社

後援／株式会社システムアリカ アートジョイ、東京芸術大学同声会



ご来場の皆さまがご感想をお寄せくださいました。たくさん嬉しいお言葉をいただきましたので、その一部をご紹介します。

・私は音楽に関しては、ポップスやジャズなどを中心に聴いてきて、クラシック音楽や、まして現代音楽については門外漢なのですが、今回のコンサートでは、とにかく次にどんな楽器のどんな音が出てくるのか、楽器のコンビネーションも含めてずっと緊張しながら耳を澄ませていた、非常に充実した時間を頂いたという感じでした。クラシック音楽であれば、途中で心地よくなって、場合によってはうとうとしてしまうんですが、桑原さんの音楽は、逆に、どんどん音に対する神経が研ぎ澄まされていくような、不思議な感覚を味わわせて頂きました。

・とっても楽しかったです。特に大編成の曲は派手でカッコよかったな～

・一言でいうと、ここ最近聴いた現代音楽のコンサートで最も感銘を受け、かつ、おもしろく楽しめたものでした。江戸の粋や近代日本文学（例えば泉鏡花）などに根ざした、より身近な日本の美が感じられ、とても共感を覚えます。難しくなく、より自然に日本的なものを桑原さんの音楽には感じます。楽器の使い方、楽器の配置、楽器の奏法、そして、いつどこからどんな音が聴こえてくるかの意外性がすごく、ビジュアルにも音響的にもおもしろかったのですが、これは演奏者は大変ですね。意外性は現代音楽のひとつのおもしろさですが、多くは一回聴いてしまうと次は飽きてしまうのが通常ですが、桑原さんのものは違います。

・素晴らしかったです。声明のリズムや音程のお話も興味深く聴かせて頂きました！またひとつ、スケールの広がった面白いコンサートでした。これからもさわりの効いた曲、沢山楽しみにさせていただきます。

・音楽に関しては貧相なノーミソなので、勝手な感想は却って失礼かも知れず…と思ってますが…とても良い刺激になりました。

・毎回思うけど、夢うつつに入る感じがしますね。夢に漂って茫漠とした空間に放り出された気分というか。今後どうなってゆくのか、楽しみにしています。

・ゆうさんの作品とゆうさんと演奏者の皆さんが素晴らしかったことは観客としてお聴かせいただき、ひしひしと周りの空気を感じていました。

・今回のプログラムですが、どの作品も興味深く聴かせていただきました。三味線と西洋楽器のアンサンブルとの関係の作り方も勉強になりました。個人的に特に良かったのが、トロンボーンソロの作品でした。所々ある譜めくりを含む中断によって、作品の持つ"時間"が面白く感じられました。

・各楽器の極限まで奏でる音にすごく感動しました。

・プレイベントは充実感満点で帰路につきましたが、本番も、もの凄いことになりましたねえ。ピグマリオンは、名曲ですねえ……これは、これから定点観測的に聴いていきたい曲だと感じました。生き物のように成長していくのではと想像します。

また、今回はプレイベントに参加できて本当によかったと思いました。もちろん当日のパンフにも詳しい説明が書いてあるけど、プレイベントを通じて、聴くべきポイントが身体の中に埋め込まれているので、当日はそれこそ身を乗り出すように全曲集中して聴くことができました。

ゆうさんの音楽は、なぜ飽きないのか？（失礼な言い方でごめんなさい）その理由として、僕は、ゆうさんの作曲の根底に言葉がある、生きた言葉や声があるからだと思っています。そういう深いところから紡ぎだされる音だからこそ、見かけだけを現代音楽風にしたものとは根本から違う作品になっている、むしろ方向が逆の曲作りをされている、というように感じています。僕はゆうさんの曲には、生命感や浮遊感を覚えるとずっと言っていますが、そんなところに理由があるのかな、と今回の個展で再認識しました。そういう意味では、今回のフィナーレの「にほふ」は、編成規模の大きい曲で、今後の可能性を大きく感じるものになりました。

・7曲すべて、どれもが素晴らしい曲、そして演奏でした。あえて「個展」と銘打たれた桑原さんの思いと狙いが手に取るようでした。なかでもやはり、「影も溜らず」「柄と地、絵と余白、あるいは表と裏」「にほふ」のスケールと迫力に圧倒され魅了されましたが、わけても最後の「にほふ」にはいちだんと心を奪われました。この曲が演奏されている間、小生はひたすら音が「にほった」という感覚を得ようと耳を澄ませていましたが、そのうち一度、「これだ！」と思えたあとは最後まで芳音が「にほひ」続けました。

・素晴らしかったです。前半ではとくに「だんだら」が好きでした。ピアノが積極的に発言するあたりから、違うフェーズに入るような感じが良かったです。また休憩後の2作品は文句なしに素晴らしい。「柄と地」は三味線と西洋楽器との距離感がとてもよく、観客としても、いつときたりとも気がぬけない感じでした。血湧き胸躍る作品でした。「にほふ」は、本当に素晴らしい作品です。「にほふ」は作曲家として、ここからまた新たな展開がありそうな気がしました。伝統的なインド舞踊の公演では、香の匂いと、音楽と舞踊家と観客とが一体になり、時空を共有します。知的な鑑賞というよりも、視覚と聴覚と嗅覚を働かせて、五感で体感する。インドで何回か体験したインド舞踊の小さな舞台を思い出しました。プログラム冊子、本当にきちんとつくってあって感心してました。言葉を費やして丁寧につくりましたね。プログラムひとつとっても、作曲家をふくめた主催者側の姿勢がよくわかります。

・18歳からの作品のパノラマ、大変興味深く聴かせていただきました。聴き手に息つく暇を与えぬ、初の「著作選集」ですね。トロンボーンのあんな超絶技巧を聴いたのは初めてです。これからの展開が楽しみです。

・自身の考え方を一つひとつ跡づける選曲で、何とも純真なプログラム構成がここに伝わり感銘しました。作品はもちろんのこと、演奏もクオリティが高く、とても好感度が持てました。作曲者の思想が文字情報として満載なプログラムになっています。

・一大絵巻物のような感じで、ストーリー性があって聞きやすかったです。あと、冥府の闇というか、底なしの昏さというものを体感できて、夏の夜のホラーとしても上質な感じがありました。

「ピグマリオン」、当時聴いていたのは、ストラヴィンスキーとか、打楽器的な側面からオーケストレーションを考えていた、東欧系の作家群でしょうか。モチーフとその展開が具体的に描かれていたような気がします。当時の曲を聴ける、読めるっていうのも、聴き手にとってはとてもよい経験、勉強中の作曲家にとってもうれしいところかと。

「だんだらの陀羅尼」の最後のところで、アンサンブルの音がとても一つになっていたのが、印象的でした。まれにみる音色の輝きでした。

「ラットリング・ダークネス」は、音や音楽の無からの発生について考えさせてくれるようなもので、「にほふ」の潜在的な背景のようなものとして聴きました。1つの楽器でとてもスケールの大きな世界がみられて、よい驚きでした。存在の一義性のようなものを感じさせられるノイズでした。

「月すべりII」はとても聴きやすかったですが、ハーブの音がどこか人魂のようで、冷たく輝きながら、浮き上がってくる感じがありました。「ラットリング・ダークネス」の後では、無音のところがむしろ聴き応えがあるような感じがして、シュトックハウゼンのlichtが何かの微小なノイズのようなもの、神秘主義的な無音の世界も感じられました。

「影も溜らず」「柄と地、絵と余白、あるいは表と裏」「にほふ」という流れのところは、「影も溜らず」「柄と地、絵と余白、あるいは表と裏」で、音響の風景画が図/地の問題系に抽象化されて、具象画が抽象画へとつながり、その後、「にほふ」で源氏物語の絵巻物のネガをみているような感じを抱きました。このへんであらためて「ピグマリオン」の具体的な世界が思い起こされるなど、よくできた円環構造があったのではないかと思います。三味線の生かし方でいうと、武満よりもずっと繊細に生かしているのではないかと思います。三味線の扱いのように、邦楽器の特性を中核に据えて西洋楽器のアンサンブルを脱構築するという方向性は、桑原さんならではの一つの可能性だと思います。そこにブレーズの書物のように、日本の古典のアイデアを形式化して記譜の方法論として採用して、音と言葉の展開を追っていくというようなコンテキストで説明をしていったときに、どうなるかということも関心があります。

「にほふ」は何度も更新されているせいか、いろいろな角度から聴くことができ、とりわけ聴き飽きないところがあったような気がします。この作品はずっと書き直して、更新していくと、作曲家としての書法の変遷を作品内で追えるので、源氏物語というコンテキストも踏まえると、一つの世界的なマスターピースになりそうな予感もしました。

あとは関連付けのマップが貴重な資料でしたね。

・どの曲にも聴き手を惹きつけて離さない力を感じました。丁寧に作られたプログラムの冊子も読み応えがありました。

・桑原さんのこれまでの歩みを、バラエティに富んだ作品で拝聴することが出来、とても楽しいひと時でした。

・面白かったです！ あえて一番といえば、僕はラットリング・ダークネスが好きでしたが、それぞれに桑原さんの印がたしかに刻印されていて。沢山メモを取ってしまいました。

・ゆうさんの履歴書、というか作曲家人生アルバム。濃厚でした。いつもは少し後ろに引いて全体像を掴む位置取りするのだけど、今日は演者さんの息遣いと残響のタイムラグを聴きたくて最前列に陣取った。圧倒的。官能的。時間かけて咀嚼しよっと。

・桑原ゆうという才能のポートフォリオを堪能。五感をフル稼働して聴いた感じ。それぞれの作品の世界観がありながら全体を通して一本筋が通っているというか。音楽はナマモノだ。そしてまだまだ進化をしていくんだろう。いい時間だった。

・日本の楽器と西洋の楽器の両方を持ちいた良い作品を最近、聴いていなかったのも、とても楽しめました。今後の活動、楽しみにしています。

・ここ数年の作品とそれ以前の作品の間にずいぶん変化が起きた気が。音の選び方が、西洋的でも東洋的でもなく、始原的な生物的運動とその伸縮を伴ったものに偏向してきているような。音高そのものの意味が後退する一方で、構築性（理論的というよりも肌触り的な）が増してきたような。ご本人の考えとは異なるか

もしれないけれど、個人的にはこのあたりに個性の萌芽の手ごたえを感じた。この先の進化・深化が楽しみ。そのこととは別に、トロンボーン村田厚生さんのあまりにも超絶的に見事な演奏に支えられた2015年の作品（改訂2017～2018）に心動いたのであるよ。

- ・なかなか一人の作曲家の作品をまとめて聴く機会はないので、面白かったです。個人的にだんだらの陀羅尼という曲が一番好きでした。

- ・音楽を「聴いている」というか…舞台を「観ている」という印象でした。先生の世界を見るような感じ。そして変わった奏法が沢山と聞いていたのですが、どこからともなく聴こえる音がどの楽器からどんな風に出てくるか分からなくて探したりも…

- ・久しぶりに現代音楽を聴きましたが、なんというか、本当に楽しい時間でした！演奏も素晴らしかったです！それぞれの曲にハッとする瞬間があり、そして音楽全体が嫌味なく、自然に変化していく様は、ホントに素晴らしかったです。

- ・桑原ゆうさんの不可思議で幻想的で、良い意味で常人とは異なる世界観にしばし入り込んだ。

- ・桑原さんの作品は、まさに聴覚を通して、視覚や嗅覚にもうったえかけてくる、時には触覚や味覚さえも感じるものだと感じました。リサーチと思考の積み重ね、そして、作り伝え続ける姿勢にとっても感銘を受けました。

- ・桑原ゆうさんの他の作品も、もっと聴いてみたいと思いました。CDなどが今後発売されたら嬉しいです。

- ・（良い意味で）一手先も読めない、スリリングな素敵な演奏でした。

- ・初めて体験する音楽世界、空間と時間でした。なんだか、錆付き始めた五感が再び動き始めた感じです。西洋クラシック音楽を中心に聴いているのですが、受けとめて、揺らぐ、共振する音楽のキャパが広がったような気がします。いつもいつもは刺激的すぎるので、たまにはいいですね。トロンボーンの表現の幅の広さには感動しました。村田さんの息遣いが、インディアン「長老の語り部」のようで素敵でした。桑原さんの新作は楽しみです。源氏物語シリーズ、深めていただきたいです。

- ・全曲さまざまな切り口から制作されていて、新鮮で素晴らしい個展でした。

- ・すばらしいリサイタルでした。演奏者が対話をしているような緊張感のあるやりとりが面白く、一曲ごとに、桑原さんの音楽の言葉のようなものが分かってくるような気がしてどんどん楽しくなっていました。